

# 実践を事例化することを学ぶ

～ まずは何をどうしたらいいのか, 最初の一歩から ～

2023.05.19

吉川公章(愛知淑徳大学福祉貢献学部)

# I. 専門職の成長モデル

H.ドレイファス：技能獲得の5段階（「純粹人口知能批判」1986,「世界内存在」2000）

①ビギナー	問題の分野にかかわるさまざまな事実や特徴を識別することを学び、そうした事実や特徴に基づいて、どう行動すべきかを判断するための規則を覚える。全体像をつかまなくてもよい「文脈不要の要素」を把握する
②中級者	現実の状況に対処する経験がある程度深まると、学んだ技能をもっと広い文脈のなかでとらえられるようになる。（客観的に規定できない「状況依存要素」）
③上級者	状況を整理して計画を立て、その計画に照らして最も重要な要素だけを選び出す。目的を明確に意識し、状況を事実の集まりとして捉えられ、状況を構成する要素がどんな相互関係にあるかがわかる。それに応じて結論を引き出し、判断し、結果を予測する
④プロ	最近の経験に応じてある特定の視点から物事を判断するようになる。直観（状況に深くかかわって類似性を認識した結果の産物）的に整理し、把握するが、どうするか考えるときは分析的になる。
⑤エキスパート	経験に裏打ちされた円熟した理解力に基づいて、何をすべきかが判断できるようになる。技能がからだの一部のように身について、ほとんど意識にのぼらなくなる。

1) 状況把握の仕方や行動様式が変化する

2) 状況を意識的に分解して構成要素を識別する客観的、分析的行動



経験の蓄積と、新しい状況のなかに過去の経験との類似性を認めることを基盤にするエキスパート的行動

3) ビギナー・中級者段階では判断力を行使する余地がない

4) 上級者で意識的に考察したうえで判断をくだすことができる

5) 過去の具体的経験に基づいて、言葉では説明しがたいかたち（＝直感的）で判断をくだす。

## 2.支援の知

### 1)実践の科学化

- ①支援者の身体を媒体として
- ②科学知と実践の価値・目的, 自らの諸感覚・直観, 経験知・専門職としての実践の経験知などを紡ぎながら
- ③属人的なスキルの表現という実践行為のなかから知的に組み立てられる

### 2)実践知

- ①支援者の身体に生じる諸経験の内的知識化作業から構築される「アート知」
- ②支援の価値・目的, 科学知を実践家の身体を経た行為へと変化せしめるスキルが機能する
- ③科学知と実践知の循環的フィードバック

### 3.スキル（技能）の種類

- 1) 属人的スキル：科学的知識の活用だけでなく，その身体を通して自己の感覚や直観，自己に集積された経験知をも覚醒・動員して生かす
  - 2) 知識的スキル：特定の課題を実施するために開発され一般化された科学技術で，伝達・学習可能な体系が構築される必要があり，専門職集団に共有される。
- スキルは1)と2)の間の両側面を往き来し，実践家に発揮されるときには振幅・流動する

## 4.スキルの特性

- 1) 自己の感覚，直観に触れつつ，かつ学習した内的な諸経験を説明可能な知識に変換させる
- 2) 既知の客観的知識を活用しながら，クライアントとの協働作業を展開する
- 3) 認知的・知的応用動作を習得し習熟するには適切な教授法・学習法が必要
- 4) 福祉事象を認知し，知識群の活用により事実の分析・統合，事実の確定という認識過程における実際的な行為のシミュレーションを経る，という思考の訓練が，繰り返し体得される経験を積み上げる必要がある。  
→ スーパーヴィジョン・事例検討・事例研究の存在意義

## 5.省察的実践家ということ：

「省察的実践とは何か（D・ショーン,柳沢昌一他,鳳書房,2007）」

### 1) 技術的熟達者：

現実の問題に対処するために，専門的知識や科学技術を合理的に適用する実践者としての専門家

⇒ 問題を解決するモデルは提示できても，問題を認識する問題（課題）を設定することができない。

## 2) 省察的実践家ということ：

専門家の専門性とは，活動過程における知と省察それ自体にある

(1) 行為の中の知：日常活動の遂行に埋め込まれた知・身体感覚（感触や探りを入れた時の手触り）

(2) 行為の中の省察：活動の流れの中で，瞬時に生じては消えてゆく束の間の探求としての思考  
→ 即興的で無自覚的



### 3) 状況との対話：行為の中の省察のひとつ

ある状況の中でかかわる対象に対して、なんらかの驚きや不確かさを感じ取り、これを解決すべく、新たな状況を形づくりながら、またそれを評価する探求。

#### 4) 「行為についての省察」 「状況との反省的対話」 :

- 行為の中で瞬時に形成してきた理解の意味を問い、実践の構造や問題を捉える
- 自らの枠組みを発見する
- それを捉え直し枠組みを組み変えて行く
- ひとつの問題の解決がさらに大きな問題の理解へと螺旋的に発展する過程

## II. 処遇検討と事例検討

### 1. 処遇検討

#### 1) 目的

- ① 援助を展開させていくうえでの問題解決、援助方針の検討・決定、意思決定の支援を図る
- ② 処遇(treatment = 待遇・扱い・処理・処置)  
= 技術的熟達に中心がおかれるもの  
ex, ケースカンファレンス、ケース会議
- ③ 経過事例, 処遇困難事例, 倫理的ディレンマ事例を用いる

2) 焦点 → 適切な援助が行われているか

= 「うまくいかない」「悪循環」「効果が現れていない」  
などに注目

①アセスメント

- ・人と環境・状況の把握（セルフケア、専門的ケア、相互ケア）
- ・問題把握
- ・課題把握

②援助計画

（援助目標の設定、時間の見積もり・方法・活用資源・  
タイミング）

③援助計画の実施

④モニタリング

⑤終結

### 3) これからの援助を適切なものにするため

- ①問題把握
- ②援助の方向性
- ③課題設定
- ④目標（ゴール）の設定
- ⑤援助の方法
- ⑥活用資源

## 2.事例検討：スーパーヴィジョンとかなりの重なりがある

事例：対象者とそこにかかわる実践者との相互作用の世界を  
現すもの

2) 事例検討または事例研究とは：

実践の目的

→ 利用者が自らの「最善の利益」を獲得すること

- ・事例研究：仮説の検証，既成理論の検証
- ・事例検討：専門的実践の維持・向上
- ・事例教育：専門支援者の養成

## 2) 目的：

専門的実践を維持・向上させ、専門的性能を更新させて行くこと

- (1) 専門的スキルを更新（ブラッシュアップ・バージョンアップ）すること
  - (2) 援助を選択する際の基準の『照合枠』の点検・更新
  - (3) 援助者が持っている『抽斗（ひきだし）』の整理・加除
- 必ずしも「経過事例」「自身の援助事例」を取り扱わない  
= 事例から「何か」を学ぶ

## 3) 焦点：

参加者自身の思考・視点・原則・価値・倫理の振り返り

## 4) 方法・プロセス

- (1)事例作成：記録を基に整理，要約する。  
客観的事実・主観的事実の両者を含む内容
- (2)事例提示：一定のフォーマットに作成する。  
プライバシーの保護に注意
- (3)客体化・対象化：第三者的に対象化し，観察し、吟味し，  
分析する
- (4)主体化：他者の実践例を自分の実践経験に引きつける
- (5)相互化：他者と討議，意見交換し，考察を深める
- (6)モデル化：今後の具体的実践の展開を考える



### Ⅲ, スーパーヴィジョン :

スーパーヴァイザーによってスーパーヴァイジーに対して行われる、専門家を養成する過程

#### 1,機能

- 1)管理的 : 組織の方針に沿った援助活動を展開し、組織の一員として適切な行動がとれるように
  - ・方針決定や伝達のチャンネル
  - ・業務遂行条件の整備・援助
  - ・組織内部のコミュニケーションチャンネル

2)教育的：援助に必要な知識・技術の伝授

- ・ 専門知識の提供
- ・ 機関の規則、関連法規、制度・法律、社会資源に関する情報の提供と意見交換

3)支持的：ヴァイジーを支持的に、精神的に支える

— 治療ではない

- ・ 援助場面に現れる癖、傾向、性格、価値観等の自分自身での点検 = 自己覚知
- ・ 悩み，不安，自信のなさの受容

## 2.形態

- 1)個人：1対1の関係で行われる
- 2)グループ：複数のヴァイジーに対して行われるもの
- 3)ピア：ヴァイジー同士が同じ立場の仲間として行うもの
- 4)セルフ：一人で行う自己点検・確認作業
- 5)ユニット：1人のヴァイジーに複数のヴァイザーが同席するもの
- 6)ライブ：利用者の面前で、ヴァイザーが実際の援助を行い、それをヴァイザーが観て学ぶ

## 3.ヴァイザー — ヴァイジー関係

- 1)組織内：上司一部下関係が持ち込まれる
- 2)組織外：組織管理の視点が弱い

## 4.プロセス

- 1)準備：波長合わせ  
→ 役職・年功でSV関係が決まるわけではない
- 2)契約：目的・目標・役割・義務・期間・回数・方法・  
時間・料金
- 3)遂行：導入 → 提示 → 探索・推敲・整理 →  
まとめ・次回の確認
- 4)材料：記録（援助記録・レジユメ）、逐語録、録画・録音、  
ロールプレイ
- 5)評価・終結：契約内容に沿った相互評価

## 5.スーパーヴァイザーの対応

- 1)批判・反論をさげ、傾聴する
- 2)自然な態度での称賛を惜しまない
- 3)理解した（している）ことを主として言葉で表明する
- 4)腑に落ちないことは見逃さず、率直に伝える。
- 5)押しつけでなく、相手の応答を尊重し、言い分をよく聴く

## 6.スーパーヴァイザーの課題

### 1)経験と専門的技術：

実践経験10年が目安、援助場面や援助技術の蓄積

### 2)事例を概念化する力：専門家としての援助の図式を描く

### 3)理論的な指針・方向性：経験と勘でSVはやらない

→ 理論の支配性・拘束性には十分注意

### 4)職業的役割意識：専門的な援助関係のひとつ

### 5)情緒状態の自己認知：

自信の内的な情緒状態を意識化 支配-従属関係はNG

### 6)自己評価：自分の専門職についての安定的評価

## IV, スーパービジョンをスーパービジョンする

スーパーバイザーとしてスーパービジョンを行っていくためには自身のスーパービジョへのスーパービジョンを受けることが不可欠



スーパービジョン実践を振り返る

1. スーパーバイザーがスーパービジョンを受ける意味
  - 1) 客観化して考える時間を持つ
    - (1) その時にはよくわからなかった感覚を言語化する
    - (2) 他者と共有しながら振り返る
    - (3) 自身の考え方, 捉え方, 焦点を見つめる
  - 2) スーパーバイザーの感覚を学ぶ
    - (1) 感情と向き合う
    - (2) 視点を変える
    - (3) 安心感
  - 3) 自分自身の課題を意識し向き合う
    - (1) 不足している知識・技術・経験・視点に気づく
    - (2) スーパービジョン機能のバランス



## 2. 材料：自身のスーパービジョン実践

- 1) 基本的にはスーパービジョンと同じだが・・・
- 2) 自身のスーパービジョン記録がのみが材料
- 3) スーパービジョンで提示された事例記録
- 4) スーパービジョン場面の記録  
→ スーパービジョンをしながらの記録は困難
- 5) では、どう記録するか → 録画・録音がベスト

## 2. スーパービジョンで提示された事例を整理する

- 1) ジェノグラム
- 2) エコマップ
- 3) 事例の概要  
生活歴, 家族状況, 病歴・治療歴, サービス利用状況,
- 4) 支援実践の経過
- 5) スーパービジョンのポイント
- 6) スーパービジョンの場面

### 3. 録画・録音

- 1) 録画がベストだろうが現状では非現実的  
では、録音は・・・
- 2) バイジーの同意さえあれば、手軽な方法
- 3) 録音しながらのスーパービジョンは可能
- 4) あとは、逐語録化する
- 5) 録画・録音があれば、そのまま利用できる  
ただし、記録保存の限界がある

### 3. 逐語録をつくろう

- 1) 録音する
- 2) 録音データを文字化する  
→ 現在はフリーソフトがある
- 3) バイジーとバイザーのやりとりがわかるように  
整理